第１回長野市おひざで絵本事業 絵本選定委員会　会議要旨

【日　時】　令和２年８月21日（金）　午後２時から午後４時
【場　所】　市役所第一庁舎４階　教育委員会室
【出席者】　委　員　飯田茂委員　稲冨裕子委員　西澤美惠子委員
　　原田國子委員　原田裕香委員　柳沢安江委員
　　事務局　樋口圭一教育次長
　　小池秀一家庭・地域学びの課長
　　奥野和義家庭・地域学びの課長補佐
　　宮崎綾美家庭・地域学びの課係長
　　西村友香家庭・地域学びの課主事
　　佐藤文香長野図書館司書
　　高遠響子南部図書館司書
　　武田久江信更保育園長

【主な内容】
□ 委員長及び委員長代理者の選出について
・互選により、飯田委員が委員長に選出された。
・委員長により、柳沢委員が職務代理者に指名された。

□ 協議事項
（１）おひざで絵本事業について
～事務局より説明～
（質問・意見無し）

（２）絵本の選定について
～事務局より説明～
（委員長）事務局説明に対して、ご質問、ご意見はございますか。
（質問・意見無し）
（委員長）（事務局説明に対する質問、意見は）無いようですので、進めさせていただきます。あらかじめ委員の皆様から推薦の絵本をお出しいただいておりますので、資料４「推薦絵本一覧」をご覧いただきながら話を進めて参りたいと思います。（議論の）進め方ですが、先ほど事務局からも（説明が）ありましたが、まず新たに配付絵本に入れたい絵本について話をし、ぜひ配付したい絵本があればそれを決めていき、その後に、現在（配付している絵本は）５冊ありますが、新しい絵本を入れたいとなれば１冊ないし２冊外すということになりますので、

どの絵本と入れ替えればよいかを決めていく、そのような流れで行きたいと思いますがいかがでしょうか。

（一同賛成）

（委員長）まず、新たに配付絵本に加えたい絵本について議論を進めたいと思います。ここに現在の（配布絵本）５冊、推薦いただいた絵本を事務局で用意していただいたものが６冊ございます。（全員が）全部（の本を）持っていらっしゃるというわけではないので、それぞれ目を通していただきながらご意見をいただくという形になるかと思いますが、（現在の配付絵本及び推薦絵本を）回覧する時間は必要でしょうか。もし必要なことがあれば、席を離れて（絵本を）見ていただければと思います。

（委員長）それぞれの委員さんから推薦したいという絵本を出していただき、資料４の２ページから４ページに推薦する絵本と理由が記載されておりますので、簡単に概要をお話いただければと思います。

（委員長）私が推薦したい絵本として挙げたのが、「だるまさんが」という絵本です。御存知の方もいらっしゃるかとは思いますが、この絵本は３部作になっておりまして、「だるまさんが」「だるまさんの」「だるまさんと」の３つがあります。その中の一番最初のものが良いと思いました。内容は、非常にシンプルな赤色のだるまが、動作をしながら色々と笑いを醸し出すとても楽しいもので、読み手の親御さんが読み聞かせをしやすい絵本です。「だるまさんが」という言葉が５回出てきまして、その後「どてっ」とか「ぷっ」とかオノマトペで進めていき、親子の時間を共有できるものだと思いました。（作者の）かがくいひろしさんは、東京の特別支援学校の先生を長くされていて、45 歳のとき絵本製作に本格的に取り掛かられたそうです。現在はお亡くなりになられているようですが、そのような（特別支援学校教師という）立場もあって、広く様々なお子さんに見てもらうという認識で絵本を作られているのかなと思いました。

（委員）私は、「めのまどあけろ」と「でんしゃ」の２冊を推薦しました。先ほど申し上げなければならなかったことかとも思いますが、毎年（絵本）を変えるのは（どうか）というようなことも以前（の絵本選定委員会）からあって、２年に１回（配付絵本を）変えていくというスタイルで今まで来られているということを以前の選定委員会で初めて知りました。今回の絵本選定委員会は、今年絵本変えるというよりは皆さんが推薦してくださった絵本を情報共有し、それぞれの現場で実際に子どもたちに（読み聞かせを）やってみて、長いスパンでどうだったかという研究ができれば、私たち委員が長野市の将来のために特に薦めたい絵本を自信を持って選定できるのではないかということで２冊推薦させていただきました。

「めのまどあけろ」を推薦したのは、日頃、自身がわらべ歌をやっており、わ

らべ歌が子どもたちを育てるだけでなく、親も助けるということをここ10年くらい目の当たりにしてきて、やはりわらべ歌を届けたいという思いがあるからです。この本は、すでに図書館から出ている3歳以降のお子さんに伝えたい推薦絵本として（リストに）掲載されていて、赤ちゃんには少し厳しいかもしれない絵本ではあるのですが、これを推薦するにあたって各子育て支援の場で（読み聞かせを）やらせていただいたところ、お母さんたちが、朝起きてから夜寝るまで言葉のリズムに乗り、お歌でずっと子どもたちの一日ができるということを結構見てくれていて、「ひっかたづけ　とっかたづけ　あとかたづけ　ひとだすけ」という部分ではお母さん達がクスクスと笑って、「これいいですね」と言っていただいた経験があったことから、お母さんたちの気持ちを楽にしながら子どもたちとの会話を歌で、リズムでやってもらえたらとても息の長い絵本になると思いました。何よりも、谷川俊太郎さんが現代を代表する詩人であることは間違いなく、まだ現在もご存命でありますし、後々谷川俊太郎という言葉に出くわすことが多くなったときに、「自分が小さい時に読んでいた絵本が谷川俊太郎だったんだ」というストーリーも紡げるのではないか、（絵本を配付した）彼、彼女達が大きくなってから谷川俊太郎という言葉にヒットしてくれるのではないかと思い推薦しました。

バイロン・バートンさんの「でんしゃ」はH29年度の長野市教育委員会　のお薦め絵本リストにも入っていましたが、ここ数年は入っていませんでした。私の子どもが女の子だったので、こういう乗り物の絵本には疎いのですが、男の子や電車が好きな子はとても好きであること、（現在の配付絵本は）全てが日本人の作家さんですが、外国人の作家の場合は出てくる人物が、肌の色も髪の色も違い多様性に富んでおり、この多様性という部分がこれからを生きていく子どもたちにとってキーワードになっていくのではないかなと思い、できれば小さいときからそういうものを自然と受け入れてもらえるような絵本を手渡したいと思い推薦したものです。これは色がとてもきれいであるということと、出版されて30年ほど経っておりロングセラーに近い絵本であること、小さくてどこへでも持っていけるというメリットもあります。

（委員）私は真島保健センターの「おひざで絵本」事業で読み聞かせをしています。「どうぶつのおやこ」は薮内正幸さんの絵が素晴らしくお母さん達にお薦めするのですが、お母さんたちは言葉が無い絵本を読むというのがとても大変ということと、赤ちゃん（の絵本）にしては大きさが大きいということで少し圧迫される感じがあるのかなと感じています。私たちの（読み聞かせの）グループでも絵本リストを作って保護者の方にお渡ししているのですが、リストに掲載する絵本を選ぶにあたってもリズムや食べ物、乗り物、動物といった子どもの身近にあるものをバランスよく入れたいという願いがあり選んでいます。「どう

ぶつのおやこ」は「年中、年長になった時に自分でお話を作って読むことができる長く使える本だよ」というお話をお母さんにもするのですが、なかなかとっつきにくいところがあるので、０歳児のお母さんが読むならとっつきやすい絵本がいいな、この絵本を何かもう少しとっつきが良いものに交換することができたらいいのかなということがふと頭に浮かび、今回（「もう　おきるかな？」を）紹介させていただきました。この「もう　おきるかな？」は、（「どうぶつのおやこ」と）同じ薮内正幸さんの絵ですが、大きさも小さく、犬や猫などの身近な動物が出てきます。０歳児の場合は、あまり身近から離れたものは好ましくなく、まず身近なもの、お母さんが言葉に発しやすいリズムのあるものを選びたいなと思い（選び）ました。今、電車の絵本の推薦がありましたが、男の子のお母さん達から「うちの子は車が好きなのですが、中々（車の絵本が）無いですよね。車の絵本ばかりを見せていてはいけないのでしょうか」という質問を受けて、「（お子さんが）好きなものから読んで、本に親しんでいけると良いですよね」という話をするのですが、今新しく出ている乗り物の絵本でこれだと思う良い絵本が図書館やインターネットで探してもなかなか無くて、（グループで作成している絵本）リストでも、内容で選ぶと古い型の車が出ている絵本しかお薦めできず、本選びというのは大変だなと思っているところです。

（委員）私は「あかちゃんあそぼ　あっぷっぷ」の絵本を推薦したいと思いました。この本は色合いがとても鮮やかなので、赤ちゃんが見たときにも伝わりやすい色合いであると感じました。また、繰り返し言葉や、読むだけでなくお母さんがお子さんと一緒に「あっぷっぷ」をしてコミュニケーションを取ることもできるという部分が良いと思いました。実際に、未満児クラスでも良く読んでいますが、子どもたちの反応がとても良い絵本です。

（委員）「だるまさんが」は、保育園で読んで絶対に外れない絵本です。どんな子どもも喜んで見ます。０歳児も（この絵本を）出したときにハッと（絵本を）目で追って集まってきます。何度読んでも先生と一緒に体を動かして遊べる絵本ということで推薦したいと思います。

「ぱかっ」は、以前の絵本選定委員会で紹介していただき、早速買って（読み聞かせを）してみました。（子どもたちは）これも大好きです。この　本を持ってきただけで３～４人が「ぱかっ、ぱかっ」と言いながら後をついてきます。０歳児でも１歳児でも楽しむことができます。

（委員長）お出しいただいた推薦絵本は以上ですが、（推薦絵本を）出されていない委員さんは、何かお話することはありますか。

（委員）絵本は好きですが、普段小さい子どもと接しておらず、選ばれた本を読み聞かせする立場なので、（推薦する絵本が）思い浮かばず提出しませんでした。

（委員長）では、（推薦絵本を提出されなかった委員さんにつきましては）議論の中に入

っていただくということでよろしくお願いします。

（委員長）委員の皆様から出していただいた推薦絵本を発表していただいて、情報共有という形で始めましたが、今色々とお聞きしながら、またはお話しながら本の良さや課題等、それぞれにお考えになっていることがあるかと思います。配付するとしたらどれがお薦めか、ご質問やご意見はありますでしょうか。

（委員）中々難しいと思うのですけれども、（配付絵本を）変えるということは、現在配付している５冊のうちのどれかと差し替えるということになると思いますので、これは事務局にお聞きしたいのですが、子どもたちの健全な成長を願ってこの事業が始まっていると思いますので、例えば、リズムの絵本（などのカテゴリー）や、絵の感じや、どのお子さんにも当てはまるような絵本など、５冊の絵本の選定基準が市としてあるのかお聞かせいただけたらと思います。また、子育て中のお母さんの声を反映した方が良いのであれば、この委員の中にそのような方がいた方がニーズに合うのではないかとも思い、迷うところがあります。ここに出ている絵本はどれも素晴らしい絵本だと思いますので、どのような観点から選定を進めれば良いのかお聞かせいただければ話がしやすいと思います。

（委員長）他に委員さんの方から同じようなご意見がありましたらお願いします。

（委員）何年か前までは市立図書館司書の方も委員にいらっしゃいました。本当は司書の方がお子さんやお母さんの様子もよく知っていると思うので、できればこちらの委員の席で一緒に色々なお話しができれば良いのではないかと思います。そうすれば、若いお母さん方の様子も分かると思います。

（委員）（絵本選定委員会が設置された）始めのころは、現場の者が委員に入っておりましたので、現場で（の様子が）ああだこうだという話が結構出ていました。

（委員長）ただ今のご意見ついて、事務局よりお話いただけますでしょうか。

（事務局）市立図書館司書に関しては、職員が委員として議論に入ることは難しいところがあります。また、どのような絵本が良いかという基準ですが、事務局としても中々決めにくいものがあります。ただ、今回絵本をお渡しするお子さんというのは、７～８か月児健康教室に参加するお子さんを対象にお渡しする絵本ということになります。健康教室では実際にお子さんに対して読み聞かせを行い、その中で絵本を選んでいただいておりますので、お母さんによっては将来的に子どもに読ませたい絵本が欲しい方もいらっしゃるかもしれないため一概にこれが正しいということは言えませんが、７～８か月児健康教室の場でお渡しするとすれば、基本的には７か月～８か月もしくは１歳未満という年齢に合わせた絵本を選定していただくということになるかと思います。

（委員）皆さん、絵本については様々なお考えがあると思います。親子で（読み聞かせを）聞いている様子を普段から見ている司書の方のご意見もお聞きすること

ができれば、ここで選定するにあたっても、色々な意見が耳に入ってくるので、「じゃあこういうことも考えよう」ということで選ぶことができると思います。例えば、今ここで私たちが「若いお母さんはどんなことが好きなのだろう」と思うと、うちの（保育園の）保護者の様子を見ていると、絵本を見て「かわいい、かわいい」と言って（絵本を）選んでいます。そうするとどんな本が（良いのか）といっても分からないですし、この本を読んだ時のお子さんやお父さん、お母さんの様子がこんな反応だというのをいただければ、こちらも選べるのではないかと思います。

（事務局）南部図書館では、おはなし会を２つの種類に分けて実施しているのですが、毎月１回、未満児向けにベビーマッサージも行う「赤ちゃんのおはなし会」を実施しています。ここで紹介している絵本というのは、オノマトペの絵本ですとか、あまり長いと赤ちゃんが飽きてしまうのでそんなに長くないが絵が鮮やかなものなど、お母さんも難しく考えず赤ちゃんと話をするように読むことができるものを（選んで）読み聞かせをしております。また、そのような（基準で選んだ）ものを図書館でもお薦めの絵本として紹介しています。

（委員）その（絵本を読み聞かせしたときの）反応は。

（事務局）やはり、色味が鮮やかなものがお母さん受けも良いです。ファーストブックと言うと、どこ（のページ）から見てもお話ができるような本が人気であり、そこからお母さん自身が「次はこの本を借りてみよう」と広がっていくように思います。その（きっかけとなる）最初の一冊目ということで、「おひざで絵本」事業があるように思います。お母さんも気負わないで済むような絵本だと、同じものを（図書館で）借りていき、そこから（読み聞かせをする絵本の）幅が広がっていくのだと思います。

図書館では、（お薦め絵本リストで）０～１歳向けに紹介されている「だるまさんが」は常に（借りられていて）無いということがあります。また、同じく０～１歳向けに紹介されている「ぱかっ」もあればすぐに借りられていくという、動きの多い絵本です。（お薦め絵本）リストに出ている絵本なので、手に取りやすいというのはあるかもしれません。また、推薦絵本の貸出回数を見てみたのですが、やはり「ぱかっ」や「だるまさんが」は４月から８月までの間に１冊あたり４～５回は借りられています。あとは２回、３回借りられている本もあります。「ぽんちんぱん」は写真絵本ですが、誰が描いた絵だとか、写実的な絵だとか色鮮やかだというところは考えず、お母さんはパッと見た印象で、惹かれる絵本を借りて行かれるのではないかなと思います。また、言葉が印象的であったりするものは読んであげたくなるのかなと思います。

（委員長）（配付絵本の）代わりに入れる（絵本の選定）基準について、事務局でどのように考えているかという話であったかと思います。答えは難しいものではある

と思いますが、事務局からの話にあったように、年代に合わせたものを選ぶということを基準として考えていくということが一つだと思います。良い絵本は沢山ありますが、私も絵本を選ぶときに何を頭に置いておくかといいますと、７か月から１歳までの間にお渡しするということで、内容によっては１歳を超えても良いのだとは思いますが、その時期の子どもに適切な絵本を選ぶということが一つの基準かなと思います。また、事務局の話の中にお母さんの反応というのがありました。（絵本は）子どもさんに渡すものですが、実際に一緒に読み聞かせしながら関わるのはお父さん、お母さんの親御さん、もしくはおじいちゃん、おばあちゃんという大人の方だと思います。その大人の方が一緒に関わっていけるということも含めた、絵本の選定を考えていらっしゃるのではないかなと思いました。

もう一つ、選定委員にもっと現場の方を（入れたらどうか）、例えば図書館の関係の人を（入れたらどうか）、というお話が出ましたが、おそらく事務局で考えていらっしゃるのは、現場は現場で良いが、選定委員会という一つの構成をする場で、（絵本を）選定して欲しいというのが基本的な考え方にあるのだと思います。これでスタートしていますから、基本的にはこれで行くのだと思いますが、皆さんの中から出た様々な声を聴きたいというのも最もなことだと思います。今日は無理だとしても、次回の絵本選定委員会までに、母の声や図書館の声などこちらが聞きたいことを提出し、それを資料としてつけていただき、（絵本選定の）材料にすることも大切かなと思っています。本日はこれで選定をしていくという方向で進め、今申し上げたことを次の（絵本選定委員会の）ときに事務局で考えていただいて、現場の声を吸い上げたものを委員会の資料としてつけていただきながら、一緒に考えていければ良いのではないかなと思います。最終的には、絵本選定委員会で決めるというのが基本ですから、そのことだけは忘れないようにしなければならないと思います。他に質問や意見はございますか。

（委員）今の話に少しかかりますけれども、私たちも選書するときに子どもや若いお母さんがすぐに飛びついて喜ぶ絵本が良いのか、長い目で見てきちんとした良い絵本を伝えていくことが大切なのかということは、轟々と意見が衝突して中々結果が出ない大きな問題です。やはり若いお母さんや子どもに食いついて欲しいという思いもありますが、その本が食いつくだけで中身が無いものであったら子どものこれからの読書につながっていくのか、ということを、赤ちゃんの絵本とはいえ大きな問題であると考えて選んでいけたらいいなと思います。

（委員）現在の配付絵本に「くだもの」という絵本がありますが、今は１歳くらいまで果物を（子どもに）あげていないのですよね。確かに絵はきれいだし、良いのですが。そうかといって（「くだもの」に代わる）果物や野菜の本が他に無いの

です。何かそういうものが無いかなということがいつも頭にあります。

（委 員）若いお母さんや現場の声は大切だなというのを今お聞きしていて感じました。本当に今、お母さんたちは（子どもに）メディア（を見せること）が中心になっています。私には甥がいるのですが、絵本を読むよりもテレビを見る時間の方が長いとを感じていて、本当は本に触れて欲しいなと思いながらも、（甥の母に対して）どのように伝えていけばよいかという難しさも身内ながら感じています。そういったところから、絵本をしっかり決めていけたら良いなと感じました。

（委 員）先日県立図書館で、KUMON さんがやっている“ミーテ”というサイトを知り、開いてみました。長野市のお母さんがどのくらいやっているかというのは分からないのですが、KUMON がやっているということは、子どもの教育に絵本が良いという前提でやっているのだと思います。おそらく、あの手この手で皆さんが絵本を（読みましょう）ということを始めているという状況としてはよく分かるのですが、私は児童センターに 15 年勤務しておりますので、一つだけ現場の声をお伝えしようかなと思います。今年の２月～５月はコロナ禍で学校が休校になったので、50～60 人が朝から夕方まで児童センターで過ごしました。その中で、初めて子どもに「おはなしして」と言われました。今までは「おはなし聞いてよ」という感じだったのですが、（子どもが近くに）寄ってきて、「おはなしして」と言われました。また、昔話を聞きたがりました。思いもつかない状況の中で子どもが生き抜こうということを感じ、物語や本が子どもにとって大切なものだということを今年初めて現場で実感しました。

このブックスタートというものが、お母さんを取り込む最初のとっかかりと位置づけるのであればそのような絵本の選定でも構わないのではないかと思います。ただ、「絵本から次に行くときにひっかかり、本に親しめない」ということをよくお母さんがおっしゃられますので、長野市で５か年計画で計画されているもの（長野市子ども読書活動推進計画）の中で、そのあたりの強化も図り、長いスパンでブックスタートを位置づけるということであれば、そのような選書もありなのではないかと思いました。

また、現在このような状況なので、皆さん公共の物を家に持って帰ることに抵抗を感じ、公共の場所に出かけることが出来ないお母さんも多いのではないかと感じています。それを思うと、（図書館で）貸出数の多い本を手元にお渡しするという今年ならではの発想での選定もありなのではないかと（意見を）お伺いしていて感じました。

もう一つ、現場では、今年１月に生まれた赤ちゃんが、マスクを外してフェイスシールドで読み聞かせをしたところ、口の動きにびっくりしていました。お母さんにお伺いしたら、初めてのお子さんで、転勤族で、１月に生まれた時か

ら父母共にマスクをして赤ちゃんを抱っこし、ミルクをあげ、オムツを変えてきたということでした。「もしかして口を初めて見たかな？」とお聞きしたところ、「そうかもしれません」と言っていらっしゃいました。また、子育て支援の現場で 20 人くらいのお母さん方に「初めて口を見るかな？」と問いかけるとうん、うん、と頷くお母さんも結構いらっしゃり、私たちが体験していない子育てを経験している方々の現状も把握したいと思いました。だから、お母さんと子どもでマスクを外して、ゆっくりと本を読んでもらえるということは今の状況下では大切なことではないかなと思います。今までとは少し違う観点がここに新しく入ったかなということを実感しているところです。

（委員長）委員の皆様からそれぞれの話を出していただいているのですが、（配付絵本を）選定する上で、今までの（配付絵本の）中で、良いものをどの程度残していくのか（ということが問題となります）。新しいものに変えていくときに、今のお母さん方の考え方や時代を考えると、今までのものではないものを、あるいは選定委員さんが思っている以上にとっかかりやすい本を望んでいるという傾向もあるのではないかなと思います。では、どこを目標にして選定すればよいのかという悩みが委員の方々から出されていたと思いますし、私も実際に選定する場合に、どこに基準をおけば良いのかということは実際に苦労しています。それを分かった上で、本日選定委員会を開催しまして、可能であれば１冊ないしは２冊（の絵本を）変更していただきたいという話がありますので、最初のところでそれぞれ出していただいた推薦絵本について、私が意見を聞いた中でまとめてみたいと思います。

「だるまさんが」ですが、読み聞かせをすると子どもが非常に喜ぶ本であるということ、お母さん方が読み聞かせをしやすい本であるということ、何歳でも喜ぶことができるとうことが挙げられました。

「めのまどあけろ」は、わらべうたを大切にしたいということが大きいかと思います。また、詩人の谷川俊太郎さんのメッセージを伝えていきたいということでした。これは、もしかしたらお子さんというよりは親御さんへ（のメッセージ）なのかもしれません。また、年齢的には１歳未満は厳しいということもありました。

「でんしゃ」については、H29 年度にお薦め絵本リストに掲載されていたが現在は無いということでした。男の子向けのものが無いということ、色（が美しいこと）や人の違い、多様性を伝えていきたいということをお話いただきました。

「もう　おきるかな？」は「どうぶつのおやこ」と絵を描いた方が同じで、やはり言葉があるという部分が良いのではないかということで、身近なものや言葉のリズムのある動物の絵本を選択したということかと思います。「あかちゃ

んあそぼ　あっぷっぷ」ですが、子どもの反応が非常に良いということや、絵の色彩がとても良いということでした。
「ぱかっ」はお薦め絵本リストにも掲載されているものですが、子どもが喜ぶということや「ぱかっ」の言葉の良さが出されたと思います。
(配付絵本の選定をするにあたっては）７～８か月の健康教室の時に絵本をお渡しするということを一つ前提として考えていただくということと、どれを変えていくのかということに関わることですが、親御さんや子どもさんにどのくらい絵本に入ってきてもらうものを選んでいくか（ということも論点になります)。ただ楽しいだけで良いのではなく、古いものも伝えていきたい（という意見もあります)。(一方で）今の親御さんが（子どもと）関われるような本であるということも必要であり、それが数字として結果に出ているのだと思うのですけれども、そのあたりをどのようにすり合わせて選択していくかということ（が論点となるの）ではないかと思います。今（推薦いただいた絵本が）６冊あるのですが、この６冊のうち、今回（配付絵本に）入れていった方が良いというご意見があれば、最終的にそれが配付する絵本として良いかどうか議論したいと思いますがいかがでしょうか。それぞれ話を聞いていただいたと思いますので、ご自身で出していただいた絵本も含めて総合的にどのような本が良いかご意見をいただければと思います。

（委員）０～１歳の絵本は、絵本を媒体にして子どもといかに楽しむことができるかということだと思います。お母さんが子どもに読んであげて一緒に楽しむことができることが大切だと思います。今配付している絵本である「いないいないばあ」はずっと（配付絵本として）入っていますが、本当にこの本はロングセラーです。何回読んでも子どもが喜ぶということで、(配付絵本として）選定してきたのですけれども、「いないいないばあ」というのは皆が昔から読んでもらっているので、大体身についています。最近小さいお子さんと関わりの無い若い方達が、初めて小さい子どもを見たときに「いないいないばあ」と遊んであげる、そのくらいに身についてしまっているものです。本当は絶対に外してはいけない絵本だとは思うのですが、仮に今ここで数年（配付絵本から）外したとしても、お父さんお母さん達は、この本が無くても子ども遊んであげることができるし、子どもとの対話もできるのではないかと思ったので、私はあえてこれを（配付絵本から）外して、他の絵本を（入れてみてはどうか）と考えてみました。
「がたんごとんがたんごとん」は言葉遊びなので、言葉遊びをしながら親子が楽しむことができます。
「くだもの」は、先ほど経験のない果物が（ある）というご意見があったのですが、経験が無くても「どうぞ」と食べさせる仕草をすると自然と子どもの口

が開きます。それで「おいしいね」とやって、それを繰り返して遊ぶことができるというのも楽しいかなと思います。
「どうぶつのおやこ」ですが、言葉が無いので、（読み聞かせをするのが）難しいと思われる方もいらっしゃるのだろうなと思いました。
「ぽんちんぱん」は大きくなれば、子どもたちがリズムを口ずさんで一人で遊ぶことができるというところが良いのかなと思います。この中で私としては「いないいないばあ」を（配付絵本から）１～２年外してみても良いのではないかと思います。

（委員長）全体の意見をお聞きになられて、推薦絵本として出されている中で、特に（配付絵本に）入れたいものはどうですか。

（委員）（「いないいないばあ」の代わりに）「だるまさんが」（を配付絵本に入れてはどう）かなと思います。これは以前の絵本選定委員会で図書館司書から推薦をいただいた本ですが、その時はこの本がまだ新しいという印象があったのか、なかなか賛同を得られませんでした。しかし、ここ何年か（現場で読み聞かせを）やってきた経験から、これは絶対に子どもとお母さんが楽しめると思います。

（委員）現在配付している５冊のうち、「どうぶつのおやこ」を別の絵本に変えたらどうかという考えでいました。やはり「どうぶつのおやこ」は配付冊数が少ないというところにまず目が行き、（配付冊数が）少ない（理由）というのは、（この絵本は）文字が無いので、（健康教室での）読み聞かせの様子を見ていた保護者の方が、自身が読むときに難しいということ感じられて、人気が無かったのかなと思います。また、「いないいないばあ」はロングセラーなので、私の中でこの絵本を外すという考えは無かったのですが、今お話をお聞きしてそのような考えもあるなと思いました。今日は、自分では「あっぷっぷ」を持ってきたのですが、「だるまさんが」は図書館に（人気で）中々無いということをお聞きし、この絵本が絶対（間違いない）ということは現場でも感じているので、「だるまさんが」を（配付絵本の）中に入れても良いのではないかと思いました。

（委員）「どうぶつのおやこ」ではなくても、薮内正幸さんの絵はすばらしいと思っています。色々な動物の絵本がありますが、これほど筆が入っている動物の絵本は無いと思っています。「どうぶつのおやこ」がお母さん達にとっつきにくいということであれば、「もうおきるかな」と差し替えて、薮内さんの絵本のすばらしさをぜひお母さん達に伝えたいと思っています。
子どもというのは（絵本の）全体を見るというよりは一箇所しか見ていないような気がします。「どうぶつのおやこ」を読み聞かせするとき、お母さん達に「まず子どもだけずっと見ていってください」と言って全て読み、次に

「お母さんを見てください」と言って全て読み、その次に「子どもの目を見てください」と言って全て読み、最後に「お母さんの目だけを見てください」と言って繰り返して４回読むということをやると、最後、絵本を見ているお母さん方は、どの動物のお母さんも動物の子どもを見つめているということ、どの動物の子どももちゃんと動物のお母さんを見つめていることに気が付き「あぁ」と感心されます。「もう　おきるかな？」もそうですし、薮内正幸さんの絵本は、どの絵本にも薮内正幸さんの真摯な感じが出ているので、ぜひ入れて欲しいと思います。

（委 員）若いお母さんが手に取ってくれないが良い絵本だというものを入れることも必要だと思います。（お母さんが手に取りやすい本を）きっかけになるものとして目玉として一冊入れてみたというのは良いかもしれませんが、お母さんが本屋に行って手に取る本は敢えて入れる必要が無いと思っています。公共のお金を使うのであれば、代々名前が伝えられるような作家の絵本を入れて欲しいなという願いがあります。

（委 員）アニメみたいなものではなくて、しっかりと描かれている本物を見せるということですか。

（委 員）はい。全部（の配付絵本）でなくても良いのですが、そういうものを一つは入れて欲しいと思います。こういうものが本物で、これはしっかり物を見ていくのに大切だよ、ということを私たちがしっかりと伝えていく義務があると思います。

（委員長）今出たご意見について、「いないいないばあ」は非常に良い絵本ではあるが変えてみるのはどうか、（代わりの絵本として）「だるまさんが」が良いのではないかということでした。また、薮内正幸さんは動物だけでなく植物の絵も描く有名な方ですが、この方の絵本を残すのが良いのではないかという話が出ました。（「どうぶつのおやこ」と「もう　おきるかな？」の）この２つの絵本について、「どうぶつのおやこ」は発刊されたのが 1966 年で非常に古いものですが、このような形で残っています。「もう　おきるかな？」は 1996 年に発刊されたもので、「どうぶつのおやこ」から 30 年後に発刊され、また、言葉が入っています。もしかすると、同じ動物の絵本ではありますが、「もう　おきるかな？」は言葉を入れるということについても配慮して発刊されたものであるのかなと思っています。今のお話をお聞きすると、こういった動物の絵本を残すという形であれば、「もう　おきるかな？」を入れているというのも一つの方法であると感じます。

「どうぶつのおやこ」を「もう　おきるかな？」に変えていくという案が一つありまして、また、「いないいないばあ」を「だるまさんが」に変えていくという案もありますが、こちらについては委員の皆様のお考えはいかがでしょ

うか。

（委 員）「いないいないばあ」を（変更する案を）言った手前（言いにくいのですが）、すごく怖いという思いもあります。

（委員長）私は「だるまさんが」を推薦させていただいたのですが、他の方の推薦絵本を見ながら、こちらもいいなと思うこともあります。「だるまさんが」を見ると、赤い色がとても単純で分かりやすく、７～８か月から１歳児に与えるには面白いなと思っているのですが、ただ、絵が少し小さいかなということも思っています。（配付絵本を）変えるということであれば、「だるまさんが」を（配付絵本に）入れて、（現在の配付絵本のうち）一冊を変えるということになります。先ほどの話の中で（「だるまさんが」と）「いないいないばあ」を交換するという意見も出ましたが、変えることに対してもう少し慎重でも良いというお考えもあろうかと思います。そのようなことであれば、（「どうぶつのおやこ」）一冊を変えて、もう一冊（の「いないいないばあ」を変更すること）については１年後にもう少し話を詰めるということも一つの方法かと思いますが、皆様いかがでしょうか。

（委 員）私も（その方向で）いいかなと思います。もう一年間皆さんと検討できるということはとても心強いことだと思っています。今日この場で検討したことを一年間ずっと頭に置きながら過ごし、来年度もう一度、今回話し合ったことはどうだったかということを検証した上で、先ほどの話にありました追加資料なども検討材料とできれば、パワーアップした選定委員会が開催できるのではないかと思います。「いないいないばあ」だけでなく、それぞれの本の差し替えについては宿題として持ち帰るのはとても良い案ではないかと思います。

（委員長）では、そのようなことでよろしいでしょうか。

（一同賛成）

（委員長）それでは、現在の配付絵本の中の「どうぶつのおやこ」を外し、絵：薮内正幸、文：松野正子「もう　おきるかな？」を新しく入れたいと思いますがよろしいでしょうか。

（一同賛成）

（委員長）「おひざで絵本」事業で贈呈する絵本については、「いないいないばあ」「がたんごとんがたんごとん」、「くだもの」、「ぽんちんぱん」、「もう　おきるかな？」の５冊に決定いたしました。話をする中で色々と課題が出て参りましたが、また事務局でも受け止めて準備をしていただければと思います。よろしくお願いします。

（３）その他

～委員からの推薦絵本を参考としてお薦め絵本リストを作成することについて事務局より説明～

（質問・意見無し）

以上